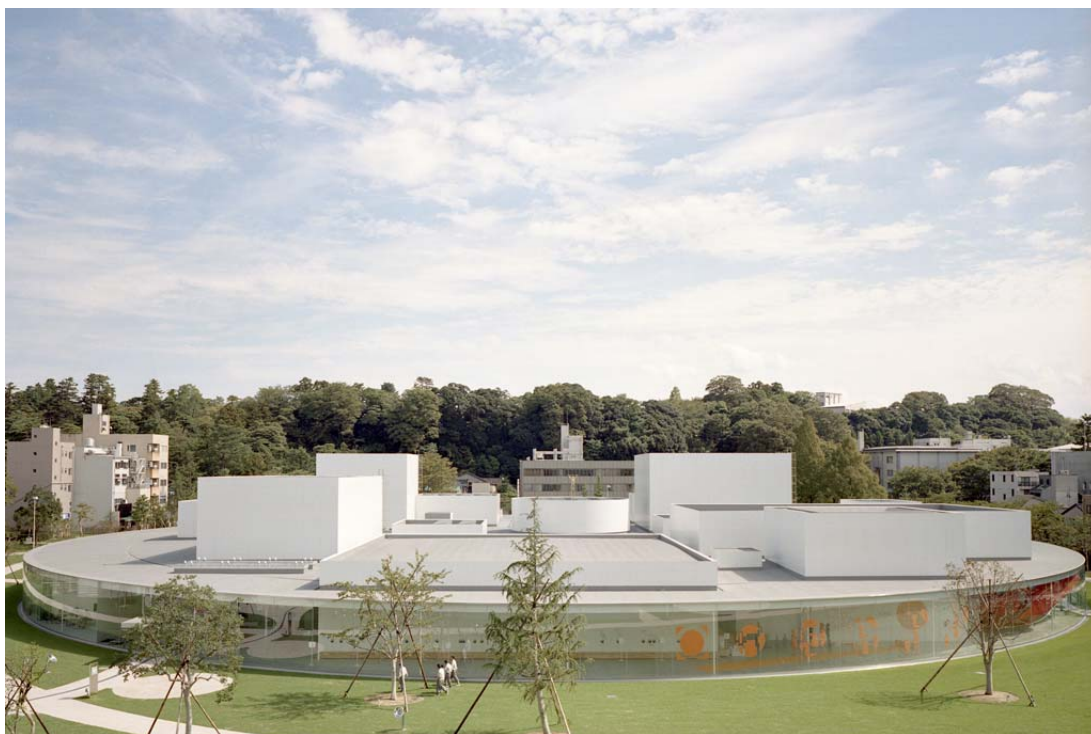




この建物は、古い歴史を持つ金沢市内の中心部に建つ美術館である。市民の交流のための交流ゾーンと展覧会が行われる美術館ゾーンを併せ持つ建物で、誰でも気軽に立ち寄れる、市民に開かれた場所となることが求められた。どこあらでもアクセスできるという敷地条件を活かして、どの方向も正面であるような裏表のない円形の建物とし、4つのエントランスを設けている。直径 113mm の円形の建物の中には4つの中庭と、建物の端から端までを見通すことのできる複数の貫通廊下があり、内部へ自然光と外の景色を取り込んでいる。それによってこの大きな円形の建物全体が明るい光に包まれて、建物の中心部でも明るく開放的な空間となっている。

外周部の交流ゾーンはフリーゾーンで、アトライブラリーやレクチャーホール、子供創作室といった施設が配置されていて、展覧会のチケットを持っていない人でも気軽に館内を一周できるようになっている。また中央部にある美術館ゾーンには19の展示室があり、そのほとんどはトップライト方式のガラス天井になっていて、展示室の中で作品を見ている時も、自然光によって外の光の変化が感じられる。様々な大きさとプロポーションをもった展示室は連続せずに、その間に空間を保ちながら配置されており、順路を規定しない回遊性のある自由な展示空間をつくり上げる。大きな展覧会の時はすべての展示室を使うこともできるし、複数の小さな展覧会を同時に行うこともできる。

交流ゾーンと美術館ゾーンは、開閉可能な透明のアクリル扉と庭で仕切られている。距離をもって配された展示空間の間を移動する際には、交流ゾーンで行われていることや外の景色が垣間見えたり中庭から空を見たり、逆に、交流ゾーンからは展覧会の様子をうかがい知ることができる。アクリル扉を開ければ、交流ゾーンも美術館ゾーンの一部となり、廊下や休憩コーナーも含めて、この建物全体が一つの大きな美術館となる。



このタウンハウスは24の小さな棟からできている。小さな棟が少しずつずれながら配置されることで、周囲の住宅に威圧感を与えないようなスケールになるとともに、マンションのようにも見えるし、集合した一戸建てのようにも見える。各住戸はいくつかの棟をまたぐように有機的につながってひとつとなっている。これにより、ひとつの住戸がどこからどこまでか外部からはっきりとわかりにくく、各住戸のプライバシーを保つことができている。

断面と平面で2つもしくは3つの数珠繋ぎで構成される住戸は、タウンハウスにありがちな短冊形の平面ではないため、玄関を入ると奥に庭が見え、2階のリビングに上がると隣の棟からまったく異なる景色が見えるというように、いろいろな生活の場面にそれぞれ違った場所や風景をもたらしている。また、各室はいろいろな方向に開いているので、採光や換気を自由にとることができる。小さな棟をずらしながら配置することで、全ての住戸が地上庭かルーフテラスをもっている。これらの庭は、テーブルをだして食事をしたり、リビングのようにくつろいだり、ガーデニングを楽しんだり、様々な使い方が考えられる。このタウンハウスでは、庭がそれぞれ独立していながらも、全体で曖昧につながってひとつの大きな庭となり、集まって住むための適度な関係と良好な環境を築けるようになっている。



この建物は瀬戸内海に浮かぶ小さな島、直島のためのフェリーターミナルである。観光客や島に住む人たちのほとんどは、この港に発着するフェリーを使って島にアクセスしている。

当初は、約 5400 m<sup>2</sup> の広大な敷地のほとんどを駐車場として整備する全体計画であり、その一角の約 600 m<sup>2</sup> 程度に港のランドマークとなるような建物が要望された。それに対して私たちは、フェリーやそれを使う人たち、車などが建物とより一体的で密接な関係となるように、長手約 70m、短手約 52m の 3600 m<sup>2</sup> の大きく軽やかな大屋根で敷地のほとんどを覆うことにした。この屋根の下には、カフェや待合スペース、観光案内所、イベントホールなどがガラスの箱として点在し、その他にもイベント広場、車の待機スペース、駐車場、荷捌きスペース、バスのドロップオフなどが半屋外の空間として計画される。そこは、フェリーを待つ人やカフェでくつろぐ人、車でフェリーに載る人、島をこれから観光する人など様々な人たちであふれ、言わば島のエントランスホールのような場所となる。そして、この屋根は少し視点の高いフェリーから見たときに、直島の風景を映しながら水平方向に広がる伸びやかなランドマークとなる。



スイス連邦工科大学ローザンヌ校内に計画されている学習センターで、図書館・ランゲージセンター・多目的ホール・オフィス・カフェ・レストランなど多様なプログラムをもつ大学の施設である隣接するローザンヌ州立大学も含めて一つのキャンパスとしていく方針があり、大学地区全体の中心となる施設が求められた。

そこで、周辺施設からアクセスしやすいように敷地のほぼ中央に建物を配置し、いろいろな人が気軽に集まり交流できるセンターとなるよう、一層の大きなワンルーフとした。天井と床は平行に緩やかにカーブし、大きさや形の違う光庭が全体に空いている。17.5m×121.5m という大きなワンルーフであるが、スラブの下をくぐって四方から建物の中心にあるエントランスホールにアプローチでき、そよから緩やかな丘を登ったり光庭沿いに歩いたりして、それぞれのプログラムにアクセスする。少し高くなった場所からは既存のキャンパスやレマン湖やアルプスを眺めることができる。

にぎやかな場所や静かな場所、大きく開けたところやヒューマンスケールな空間など、高低差や距離、大小さまざまな光庭によって、性格の違うプログラムのための多様な空間が、大きなワンルーフ空間につくり出される。大きなイベントの時はホールの観客席が斜面まで広がったり、眺めの良い場所で図書館から借りてきた本を静かに読んだり、大きな光庭でコーヒーを飲んだり、それぞれのプログラムがやわらかく分けられながらも、混じり合うような建築を目指した。



北フランス、リール近郊の町、ランスの中心部にある、炭坑の跡地に計画された美術館とランドスケープ。プログラムは、大きくは二つの展示スペース、ひとつは時々展示が変わる常設展示のための、もうひとつは企画展示のためのスペースである。さらに、様々な美術館の機能一般を収める。延床面積は 20,00 m<sup>2</sup>前後になる予定。

ヴォリュームを小さく分割して、敷地を乱すことを避け、とても大きなプログラムのスケールを小さくすることを考えた。その各棟の大きさとカーブした配置は、周りの“カバリエ”（昔の潭鼓の一般用線路の土木子遺構）のスケール感とかたちを取り入れたもので、敷地のわずかな傾斜にも従ってながれるように連続する。さらに、視覚的にも実際的にも敷地に連続するために、真ん中のガラスのヴォリュームは、建物の相田のヴォイドとして、扱った。このガラス・ボックスは、エントランス・ホワイエであり、町にとっての大きなパブリック・スペースでもある。敷地のあらゆる方向が見通せ、開放されている。人々は美術館に入らなくても、通り抜けることが出来るようになっている。

私たちは、この敷地に対して親和力のある柔らかい建物をつくりたかった。そこで、敷地の長く伸びた、湾曲したスケール感にあわせて、ヴォリュームにわずかなカーブを与えた。自然に建物を溶け合わせるために、高い反射率を持つよう磨かれ、酸化被膜されたアルミによって、ファサードがつけられる予定である。にじんだ周囲の風景が映し出され、それは情景や天候によって変化する。